

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-09-12

<書評と紹介> 安斎正人・入間田宣夫監修、東北芸術工科大学東北文化研究センター編 『北から生まれた中世日本』

永田, 一 / NAGATA, Hajime

(出版者 / Publisher)

法政大学史学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政史学 / 法政史学

(巻 / Volume)

80

(開始ページ / Start Page)

89

(終了ページ / End Page)

94

(発行年 / Year)

2013-09-30

〈書評と紹介〉

安齋正人・入間田宣夫監修

東北芸術工科大学東北文化研究センター編

『北から生まれた中世日本』

永田 一

東北芸術工科大学東北文化研究センターは平成十九年度より文部科学省オープン・リサーチ・センター整備事業「東北地方における環境・生業・技術に関する歴史動態的総合研究」に取り組み、その一環として平成二十二年四月二十四・二十五日に「東北古代の変動―火山灰と鉄―」、平成二十三年九月二・三日に「中世への胎動―北の視点・南の視点―」をテーマとする二度のシンポジウムを開催した。本書は、この両シンポジウムの成果をもとに、参加者が書き下ろした論考を一書にまとめたものである。

本書はシンポジウムに沿った構成となっており、第一部「古代東北の変動―火山灰と鉄―」、第二部「武家政権の登場―交易・交流と地域差―」にそれぞれ六本の論文が収められている。

第一部では、十世紀初頭の十和田火山の噴火、七世紀以後に拡大する鉄生産とその消費について、地域の生態系や社会に与えた影響という視点から検討し、古代東北に起こった激しい変化につ

書評と紹介

いて明らかにすることを目的としている。

第二部では、十一世紀前後の時期に焦点を合わせる。前九年・後三年合戦をはじめとする戦乱が発生した時期だが、そうした中で新たな政治・経済・生活の形式が生まれ、やがて中世に受け継がれていく。一方、北の世界の内部では徐々に地域差が明確化しつつあり、新たな交易・流通や統治システムが創出された。なぜこのような現象が起きたのか。似たような歴史が生み出された南の地域との比較を交え、古代から中世への歴史的変遷において、北の世界で創出されたものが果たした役割、与えた影響を明らかにすることを目的とする。

まず、各論考の内容を評者なりに要約して紹介し、それから本書全体についての考えを述べさせていきたい。

第一部「古代東北の変動―火山灰と鉄―」では、まず小口雅史「火山灰と古代東北史―十和田aと白頭山を中心に―」が、十和田aと白頭山という二つの巨大噴火による火山灰降下が北東北の古代社会に与えた影響について論じる。十和田a火山灰の降下年代は九一五年とみて問題ないとするが、白頭山火山灰の降下については、日本の史料における十世紀前半の火山関係記事のどれが対応するか、史料の限定は自然科学的成果がさらに蓄積されるのを待つべきとする。また、火山灰の降下に対応し集落移転や鉄生産・鍛冶技術の導入などによる生業の転換を図ったことを指摘する研究に注目し、「防御性集落」について、鉄関連の自立的技術獲得による生業の転換と関わりとする説には一つの可能性を認めるとするが、区画を結界と考え火山灰降下の影響を全面的に見出そうと

する説に対しては、堀と土塁を境界と見る実例が古代日本において知られていないことから、なお検討の必要があると指摘する。

松本建速「古代の東北北部における集落の盛衰を読む」は、東北北部（馬淵川流域と米代川流域以北および津軽海峽以南）の集落数の増減を四期に区分し、その背景について論じる。1期（六世紀中葉以前）、2期（六世紀後葉～八世紀）の時期の東北北部は西側より東側が寒冷だったが、その東側に古墳文化社会・古代日本国の雑穀栽培と馬飼を生業の主体とする地域の人々が移住したとする。3期（九世紀～十世紀前半）の時期には古代日本国の水稻耕作地域の人々が東北北部の西側に移住したとする。また、本州の他の地域で九世紀に集落が急増し十世紀前半に衰退した例について富豪層との関係を指摘し、3期の時期の東北北部の集落の増減も私的開発と関係すると述べる。『粉河寺縁起』に見る長者の家のように溝を掘り門付近を武装した者に守らせるあり方は、九～十世紀に富豪層が非合法な開発を行ったことに契機が求められると、それが富豪層やそれに繋がる人々により東北地方に持ち込まれ、「防御性集落」が出現したと指摘する。

飯村均「陸奥南部における古代鉄生産」は、福島県新地町武井地区製鉄遺跡群と福島県南相馬市原町区金沢地区製鉄遺跡群を中心に、七世紀中葉の陸奥南部への鉄生産の導入と鉄生産の展開を紹介し、歴史的意義について論じる。鉄生産の背景について、武井・金沢地区の鉄生産の第一の盛期（七世紀後半）は阿倍比羅夫の遠征に並行して太平洋側で行われた遠征と、第二の盛期は東北三十八年戦争とそれぞれ関係し、蝦夷征討と密接に関わるとする。

中世の鉄生産への展望として、宮城県大貝窯跡群の踏みふいご（十四世紀以降）をとりあげ、古代の宇多・行方郡の製鉄炉の踏みふいごと同様の送風施設に注目する。また、把手付土器が陸奥北部で十～十一世紀に盛行するのは、国府周辺で供給された把手付鉄鍋の影響とする。さらに中世東国を代表する煮炊具の内耳鉄鍋は陸奥・出羽北部で十一世紀に成立した可能性が高いとし、律令国家が東北経営を通してもたらした「人・物・技術」が陸奥・出羽北部に到達し、日本の中世社会を規定したとする。

八木光則「古代蝦夷の鉄利用」は、蝦夷社会における鉄生産、鉄器の普及とそれによる蝦夷社会の変化を総合的に論じる。まず、蝦夷社会では九世紀以降、製鉄、精錬、鍛錬鍛冶の諸工程の技術を習得し、独自の工夫を加えていたことを指摘する。蝦夷社会への鉄器の普及について、東北北部では鉄器の遺存率が九世紀以降に急増するが、農具は各地で均等に増加し、武器・建築具・工具は城柵を中心に拡大すると指摘する。鉄生産や鉄器普及による在地社会の変化について、東北部では七～八世紀に農具と武器がすでに普及していたため九世紀は微増にとどまるが、東北北部では九～十世紀に農具と武器の普及が拡大すると指摘する。また、斯波胆沢では農具が武器の遺存率を上回り、秋田やそれより北の地域では武器が農具の遺存率を上回るが、後者の地域は武装する集落の姿が推定できるとする。そして東北北部では末期古墳の終焉、集落の拡大、住居構造の変化、鉄器の増加が九世紀に起こるが、こうした変化は蝦夷社会の内的発展の中で捉えるべきとする。

高橋学「十和田火山噴火と災害復興―出羽国・米代川流域の村々に焦点をあてて―」は、十和田火山噴火が米代川流域の地域に与えた被害、噴火後に急増する集落形成において城柵が果たした役割について論じる。十和田火山噴火に伴うラ・ハール堆積物(シラス)による埋没家屋の遺跡の事例を紹介し、続いて米代川流域の村の実態と城柵の関係について考察する。払田柵跡の鍛冶関連工房では工房建築にも力を入れていたとし、蝦夷・俘囚と称された人々に鍛冶・鍛錬技術とともに壁立式堅穴建物構築の技術も伝えられたと指摘する。十世紀前半を中心に米代川流域や津軽地方で古代集落が急増するが、蝦夷への壁立式堅穴建物構築の伝授は鉄という生業の確保による定住化と密接に関わるとする。城柵がこうした施策を行った要因について、九世紀代における奥羽山脈西麓一帯での森林伐採による環境悪化に十和田火山噴火による降灰が加わり耕地の維持が困難となったこと、一方で当該期は気候温暖化の時期で、水田稲作の適地が北方に拡大したことをあげる。

横山英介「アイヌの鍛冶と焼畑―火山灰もたらした二つの新事実―」は、北海道アイヌは鍛冶を知っていたのか、農耕を行っていたのかについて、考古学による新知見を紹介し論じる。擦文文化の中期段階(九世紀中頃)より鍛冶を示す遺構が増え全道へ広がるとし、後期末葉(十二世紀末)から精錬が行われたとする。アイヌは製作・修理といった鍛冶や、精錬を行っていたとする。また、擦文文化から生業体系に農耕が加えられ、擦文文化前期から畑作中心の農耕が見られるが、全道域への拡大は中期以降とする。アイヌ文化の最も古い畑跡としては十三世紀末葉のものが発

見されており、渡島半島域は焼畑跡、胆振西部域とそれ以东・北部は普通畑跡という傾向があるとする。擦文文化の農耕とアイヌ文化の農耕は、普通畑を中心とする栽培作物や鉄製農耕具の種類などが共通し、畑作農耕が継承されたとする。アイヌの焼畑については、平安時代後期に本州東北部でも行われた「アラキ型」の焼畑が直接・間接に北海道に持ち込まれ定着したと指摘する。

第二部「武家政権の登場―交易・交流と地域差―」では、まず入間田宣夫「安倍・清原・藤原政権の成立史を組み合わせ―北方世界における地域差に関する考古学的所見に学んで―」が、安倍・清原・藤原三氏の政権成立について地域差をキーワードとし総合的に論じる。延久二年北奥合戦の背景について、交易・鉄生産・集落形成などの展開において、衣曾別島・閉伊七村と津軽平野・馬淵川流域・米代川流域の間で日本国側への対応が分かれた地域差に求められるとする。また、延久二年北奥合戦の後に清原真衡が行った、血縁・地縁を超越した京畿方面からの有能な人材の登用、一族への「貴種」の男女の迎え入れなどを、武人政権の原型の模索だとし、清原真衡は広大な占領地の統治というオフィシャルな課題に直面したことにより「御館」(みたち)の尊称で呼ばれたとする。さらに、延久二年北奥合戦から都市平泉建設に到る時期に、武人による新たな統治形態の模索、荘園の構立による分散的・多元的社会状況の現出という「中世のかたち」の祖型と見なさうる事象が北の辺境から生み出されたことを論じる。

小川弘和「荘園制と「日本」社会―周縁からの中世―」は、南・北両周縁からはじまる荘園制の検討を通じ、日本の中世社会の形

成について論じる。荘園制が受領制のなかから形成された過程や荘園制形成の現場での地域側の勢力の活動について説明し、荘園制を媒介に持ち込まれた「日本の神仏」が覆う範囲が中世の「日本」であると指摘する。南九州は荘園制により「西の境界」として中世日本に定位され、地域権力・薩摩平氏はその内側にとどめられ、「南のボカシの社会」の形成も未完に終わったとする。一方、奥州藤原氏のもとでは奥羽の南・北に道南をも加えた「北のボカシの社会」が形成されたとし、北の周縁は武家政権への委任統治を生み出し、列島上における「日本」以外の統合論理という希有な歴史的可能性を胚胎させていたと指摘する。また、荘園制や地頭制を媒介に「日本の神仏」が民衆と対峙する、中世の国土と国家は、奥羽の宿した可能性を圧殺し、鎌倉による平泉の否定的継承により確立したとする。

八重樫忠郎「考古学からみた北の中世の黎明」は、城柵統治領域の遺跡である大鳥井山遺跡・鳥海柵遺跡・柳之御所遺跡を比較して十一～十二世紀の変化を検討し、また城柵非統治領域の遺跡である新田(1)遺跡・宇隆1遺跡の遺物の検討を通じ、十一～十二世紀における北方世界の変化について考察する。城柵が機能を失うと在庁官人は政治形態や統治方法を引き継いだとし、前九年合戦後の清原氏が御館と敬称されるように館を形成した段階を、国司と対等の権力者の出現と指摘する。新田(1)遺跡について木製品や土器を検討し、在地側が意図的に宗教関連(先進文化)を持ち込んだとする。そして、宇隆1遺跡で発見された常滑窯産の大壺に注目、経塚として埋納されたもので平泉との関係を示す重要な

ものだと指摘する。東北地方では自らの正統性を示すため城柵に端を発した模倣を行いつつも、常に在地の論理を組み合わせており、安倍氏や清原氏のための城柵が有していた権益を得ることであって、模倣はその手段に過ぎなかったとする。

襄島栄紀「十～十一世紀の北東アジア情勢と「北の中世」への胎動」は、十～十一世紀における北東アジア情勢や「北回り」交流の実態と意義について検討し、その展開が「古代から中世」への移行の考察において重要な鍵となることを論じる。北東アジアの諸集団の動向について検討し、女真の活発な交易活動は、後背地である五国部との関わりが不可欠で、サハリン・北海道方面にも影響を与えた蓋然性があり、契丹・聖宗期を第二の画期として北東アジアの交易の大規模化が一層進んだと指摘する。また、十世紀前後には、大陸方面の新たな情勢、擦文文化の拡大・進出により、サハリン経由で大陸と北海道を結ぶ「北回り」の交易ルートが七～八世紀以来の活性化を見せた可能性が高いとする。さらに北方産品の受容が平安期の日本社会に与えた影響についてサハリン産のクロテン・鶯羽・肅慎羽を手懸かりに考察し、なかでも肅慎羽について、「異域の民」「大陸に連なる民」としての排外的な「エゾ」観を準備・媒介する役割を担ったことを指摘する。

瀬川拓郎「中世アイヌ社会とエスニシティの形成」は、十世紀に起きたアイヌ社会の構造変動がエスニシティの形成をともなった可能性について論じ、アイヌ史の内実をともなう「中世」像確立についての議論を展開する。擦文時代中頃(十世紀)のアイヌ集団の対外交流の第三画期について、日本との交易拡大に対応す

るための活動圏拡大や地域集団の新たな展開により、アイヌ集団の歴史における「縄文的世界」が終焉したと指摘し、これ以降をアイヌ史における中世と呼ぶべきだとする。また、『諏訪大明神絵詞』に見る渡党・唐子・日ノ本は青苗集団・日本海沿岸集団・太平洋沿岸集団に対応し、こうした地域展開が発生した十世紀こそ、アイヌ社会の側に三集団各々のアイデンティティとそれを表す「名乗り」が生まれ、また日本側が「名づけ」を行った時期だと指摘する。そして、従来の原初の紐帯が全島で再編され、政治経済的関係にもとづく自己意識として新たな次元に移行し、アイヌ集団のエスニシティ形成の画期となったとする。

高梨修「鎌倉幕府成立期前後における南海島嶼海域の様子―南海島嶼海域をめぐる政治的動態の考察―」は、南方物産交易が営まれた南海島嶼海域の政治的動態について、城久遺跡群Ⅱ期（十一世紀後半～十二世紀）に注目し、中世移行期の様相について論じる。奄美群島・沖縄諸島・先島諸島に共通する広域土器圏が形成される十二世紀前後が中世移行期の画期だとし、城久遺跡群Ⅱ期は琉球諸島まで日宋貿易の交易圏が拡大した時期と重なり、平氏政権と密接な関係を持つ南海島嶼海域における日宋貿易の拠点と位置づけられるとする。また、源頼朝による文治五年（一一八九）のキカイガシマ合戦の舞台は喜界島だとし、この合戦で交易拠点機能が失われたため、城久遺跡群Ⅱ期とⅢ期（十三世紀後半～十五世紀）の間の十三世紀前半の空白期が生じたと指摘する。城久遺跡群Ⅱ期の搬入遺物の様相から、日本・高麗・宋の商人の関与が考えられるとし、倭寇の出現に先行して越境的性格の集団が形成

されていたとする。さらに、「按司」についても考察する。

本書全体を通読して考えたことを述べていきたい。本書は「火山灰と鉄」中世につながる新たな交易・流通・統治システムの創出」という軸を設け、それを中心にさまざまな視点から北東北という地域の歴史を読み解こうと試みている。

東北地方についての論考を中心に、横山英介氏・瀬川拓郎氏らが北海道について、蓑島栄紀氏が北東アジアについて論じており、北東北という地域の歴史的發展を北東アジア・北海道・古代の日本国との交流の中に位置づけて考えることの大切さを改めて認識させられる。またこれに加え、入間田宣夫氏が北方・南方からの作用の強弱の差について述べ、小川弘和氏が荘園制を通じて南北両周縁について論じ、高梨修氏が南海島嶼海域の研究の側から列島北縁との比較を行い境界領域における交易活動の特徴を検討するなど、列島全体・南北の境界領域・大陸という巨視的な観点から日本史を考えることの重要性を学ぶことができるのも本書の特徴である。

第一部は「火山灰と鉄」を中心テーマとするが、これに密接に関わる「防御性集落」の解釈が分かれる点も注目される。高橋学氏が鉄関連の自立的技術獲得による生業の転換と「防御性集落」の発生の関係性を論じ、小口雅史氏も区画施設のすべてが防御的施設であるとは考えないとの立場から、高橋氏の説に一つの可能性を認めるとしている。しかし、一方で松本建速氏は九～十世紀の富豪層の活動により、屋敷の周囲に防御的施設を備えるという考えが東北地方に持ち込まれ、「防御性集落」が発生したと指摘す

る。「防御性集落」の区画施設については、本書の中においてもこのように異なる見方が提示されているが、その理由は高橋氏が北東北の自然環境の変化を重視して論じたのに対し、松本氏が北東北と日本国側との交易から論じたという、背景の捉え方の違いによるものである。「防御性集落」が集中的に営まれるようになる十世紀の北東北の状況をどのように捉えるかという問題がここにはある。八木光則氏が指摘する九世紀における蝦夷社会の内的発展の問題とも関連づけながら考えていくことが重要だろう。

第二部冒頭の論文で入間田宣夫氏は、延久二年北奥合戦勃発時には京都一極集中を基調とする律令的な統治の外延的な拡大が極限にまで達したことで、一転して新しい「中世のかたち」が生み出される「臨界点」に達したとし、日本史における十一〜十二世紀の位置付けを述べている。これこそが、第二部に通底する視点だろう。第二部では、葦島栄紀氏が平安京から北東アジア一帯までの交易・交流について論じ、高梨修氏が山東半島・朝鮮半島・九州・琉球弧・台湾をつなぐ地域を「韓日琉中弧島嶼帯」と称すべきかとして交易と交流を論じており、視野を大きく広げてくれる。

ところで、小川弘和氏は奥州藤原氏と薩摩平氏を比較する中で、阿多忠景は莊園制Ⅱ「日本」の枠組から逸脱し、南九州とキカイガシマ海域にまたがる「境界権力」への脱皮途上にあつたが、「日本」の貴種・源為朝を婿に迎えて權威の補強を図つた彼には、それを相対化して南の「ボカシの地域」に固有のカタチを与えうる論理はないままだったと指摘する。高梨氏は城久遺跡群Ⅱ期（十一世紀後半〜十二世紀）の活況は日宋貿易によるもので、平氏の関与

を想定する。阿多忠景が平氏の圧迫を受けてキカイガシマに逐電するのは保元年間（一一五六〜一一五九）とされているので、つまり、城久遺跡群Ⅱ期を含めたこの海域における日宋貿易の活発な交易の開始から阿多忠景の逐電まで約百年の期間があつたことになる。阿多忠景を含め南九州で交易により力を蓄えた諸勢力は、なぜこの百年の間に境界権力へ脱皮することができなかったのか、また「南のボカシの社会」の形成に必要な独自の論理を構築できなかったのだろうか。今後、奥州藤原氏との比較を通じてこの問題について考察していくことが重要となるだろう。またそれは、奥州藤原氏発展の要因や北東北という地域の特徴を改めて見直すことにもつながる。南北の境界領域の比較研究については、共通点だけではなく、このような相違点の考察こそが今後より一層重要になると考える。

本書は十世紀〜十二世紀における北東北の自然災害や争乱などによる変動や、その中から生まれた政治・経済・生活の形式が中世の武家社会成立にどのような影響を及ぼしたかを明らかにしようとするものである。最新の考古学の成果を交えて各論者が境界領域の諸様相を論じ、また古代から中世への移行を巨視的な見方で捉えようとする、意欲的な内容となつている。

本書に収録されている各論文を紹介し、評者が感じたことなどを述べさせていただいた。評者の力不足により、論旨を読み誤つたり、あるいは的外れな指摘などをしていないかと恐れている。ご寛恕を願えれば幸いである。

(A5判、二八九頁、二〇一二年七月、高志書院、価格六〇〇円＋税)